

「伝統と創意」

広報紙

書くよろこび

令和7年(2025年)4月発行

第
18
号

■文部科学省 初等中等教育局長寄稿 1面	
■特集・文房四宝	
／デジタル教科書の推進議論	2～5面
■「できた」が増える書字指導	6・7面
■識者インタビュー	8・9面
■第20回手書き文字ばんざい!	10面
■シルバー書道展／留学生と対話型鑑賞会	11面
■大阪・関西万博で5月に 「未来へつなぐ日本の書」開催	12面

私たちは児童生徒一般すべての人々の書写の環境を整え、豊かな心を取りもどすため総力をあげて「手書き文字の振興」に取り組んでいます。



私たちは「日本の書道文化」のユネスコ無形文化遺産登録を応援しています。

- 一、日本の伝統文化芸術を守り育む
- 一、すばらしい日本語の心を伝えよう
- 一、心を映す文字をより大切にしよう
- 一、書く楽しさ喜びを通して健やかな心を養おう
- 一、美しい文字で潤いのある豊かな人生を送ろう



豊かな心は手書き文字から

寄稿

文部科学省
初等中等教育局長

望月 禎氏



社会のデジタルトランスフォーメーションが進む中、従前よりも手書きを行う機会が減っていると感じている方もいると思います

書いたり、親しい人に手紙を書いたりする等、学習や日常の様々な場面で書写の能力を生かすことができるよう、指導の充実を図っ

また、中学校では、文字を文化として認識し、その豊かさに触れながら効果的に文字を書くことができるように指導することとしています。高等学校においては、中学校国語科の書写との関連を図り、国語科の中で、相手や目的に応じて効果的に文字を書く機会を設けるとともに、芸術科書道の中で、表現と鑑賞の学習活動を通して、生活や社会

末等のICT環境が整備され、国語科の書写等の指導の場面においても、例えば、動画で運筆の様子を見たり、筆順を確かめたり、自身で書いた文字を撮影して自分の課題を見つけ、次の学習に生かしたりするなどといった工夫が図られているところです。

社会や学校を取り巻く環境が変化する中でも、我が国の伝統や文化の中で育まれてきた文字文化を大切にし、その豊かさに触れる機会を設けることが大切です。そうした観

日常で書写生かす学習

が、将来を担う子どもたちに、人のぬくもりが感じられる手書き文字に触れてもらうことは大切です。

このため、小学校及び中学校の国語科の書写の授業では、文字を正確に読みやすく書くことができるようにするとともに、ノートに

ているところです。例えば、小学校では、画の長さや点の方向などに気を付けて書いたり、書き始めや書き終わりに気を付けて書いたりする指導を通して、適切に運筆する能力を身に付けられるよう、指導を工夫していくことが望ま

学校では、GIGAスクール構想により1人1台端末

の中での文字や書、書の伝統と文化について実感的に理解し、芸術科での学びを心豊かな生活や社会を創造していくことに生かせるよう、学習の充実を図っています。

学校では、GIGAスクール構想により1人1台端末

点から、公益社団法人日本書芸院が実施されている様々な取組は、大きな役割を果たしていると考えています。今後とも日本書芸院の活動が我が国の伝統的な文字文化の継承・発展に一層寄与されることを期待しています。

学校では、GIGAスクール構想により1人1台端末

文字・活字文化振興法の骨子

【目的】

文字・活字文化の振興策を推進し、知的で心豊かな国民生活および活力ある社会の実現に寄与する。

【基本理念】

国民が等しく豊かな文字・活字文化の恵みを受ける環境を整備する。国語が日本文化の基盤である

ことに配慮する。学校では「言語力」をばぐくむ。

【責務】

国や地方公共団体は文字・活字文化の振興策を策定し、実施する責務がある。

【地域での振興】

市町村は公立図書館を設置する。

国や地方公共団体は司書の充実など人的体制を整備し、資料の充実を図る。学校図書館を開放する。

【国際交流】

文字・活字文化の海外への発信を促進。翻訳の支援をする。

【文字・活字文化の日】

国民の関心と理解を深めるため、十月二十七日を文字・活字文化の日とする。

伝承される匠の技

文房四宝 — 墨・筆・硯・紙 —



書道の大切な用具・用材として古来、文人や書の道を志す人らに大切にされてきた文房四宝。墨、筆、硯、紙。どれ一つ欠けても、書道芸術は成立しません。国の登録無形文化財「書道」では、「文房四宝の使用を原則」とされました。また、2024年に日本政府が行った「書道」のユネスコ無形文化遺産登録提案でも、これらを使用して「伝統的な筆遣いや技法の下に、手書きする文字表現の行為」と記されています。そうした文房四宝の製造技術を伝承し、大阪・関西万博の会場で日本書芸院などが開催するイベント「未来へつなぐ日本の書・空・海・時を超えて」に参加して実演を披露する、それぞれの「匠」を訪ねました。

奈良墨

日本を代表する墨ブランド



「にぎり墨」体験もできる「墨の資料館」

墨は約2000年前の中国で誕生したとされています。最初は「墨丸」と呼ばれる小さな球形の墨でしたが、紙の発明で墨の使用量が多くなり、次第に現在のような形になっていったと考えられています。

日本に墨がもたらされたのは飛鳥時代。日本書紀には、610年（推古18）に高麗の僧・曇徴が「よく紙墨を作る」とあり、朝鮮半島の高麗を経由して渡ってきたことをうかがえます。

墨の原料は、煤と、牛など動物の皮から抽出した膠。当初は、ヤニを含んだ松の木を燃やした煤で作る「松煙墨」でしたが、やがて、植物性の油を燃やした煤を使う「油煙墨」が誕生します。室町時代には、奈良・興福寺二諦坊で、仏前の灯明などから集めた煤を利用した油煙墨が作られ、「日本奈良墨始」と刻印されました。



「墨運堂」の職人・林さん

木型彫刻に取り組む「呉竹」の米谷さん



と期待を込めます。

固形墨の製造は、ほとんどが手作業。煤と湯せんした膠を混ぜ合わせ、膠の独特の臭気を消すため、麝香や龍脳といった香料を加えます。混ぜ合わせる作業は最近、機械で行われることが多くなりました。

混ぜ合わされた墨は職人が製品の大きさに合わせてちぎり、もみ板の上で体重をかけたたり、何度も転がしたりして練りあげます。つやが出てくるまで練ったあと、銘や装飾が彫られた木型に入れます。木型は専用の万力に挟み、製品によっては30分から1時間、圧力をかけます。

「筆・ペン」で知られる呉竹（奈良市南京町）で型入れ作業を担当する西岡玄堂さんは、この道30年。「難しいのは、気温と湿度に合わせて、均一に混ぜること。毎日変わるので、もちろん経験もありますが、やってみたいと、という面もあります」と話します。

木型から出した墨は、1日置いたあと、角のところに残った余分を削ります。この作業のあと、木灰を詰めた箱に並べて乾燥させます。灰に埋めるのは、急激に乾



型入れ作業を担当する西岡さん

燥させると墨が割れるためです。湿度の多い灰から少ない灰へと入れ替え、1か月ほどかけて、ゆっくりと乾かします。灰乾燥が終わると、稲わらを編んでつるし、自然乾燥。長いものでは1年間かかることもあるといます。乾燥が終わった墨は、軽く水洗いして、ほこりなどを除き、文字や図柄に色を入れて仕上げます。

同社には、墨の木型を彫る職人も在籍しています。現在、墨の木型を彫る職人の多くは引退しており、社内に彫り職人を抱えているところはほとんどない

といいます。27年間、木型彫刻に取り組み米谷玄慎さんは「デザインをよく見て、忠実に彫ることですね。雰囲気を変えることのないように気を付けています」といい「3週間、4週間かかることはざらにあります。最近、ようやく余裕を持って仕事ができるようになりました」と話しています。

西岡さん、米谷さんは「未来へつなぐ日本の書」でその技術を披露します。

熊野筆

「特別な一品」職人が応える

広島県西部に位置する熊野町。周囲を山に囲まれた、静かなこの町で生産される熊野筆は、国内シェアが8割にも及び、日本一の生産高を誇ります。

熊野で筆づくりが始まったのは、江戸時代。当時、熊野の住民は、農閑期に和歌山の熊野や奈良の吉野へ出稼ぎに行き、帰路に奈良で墨や筆を仕入れて行商するという暮らしをしていました。1834年(天保5)頃、上方から筆、墨を仕入れて商っていた住屋長兵衛が、毛筆の製造技術習得のため、13歳の佐々



必要な長さにそろえていく

木為次を摂津国・有馬に派遣。同時期に、商人の孫井田才兵衛が浅野藩(広島)の御用筆司・吉田清蔵を熊野に招いて、筆づくりを始めました。

当初、筆づくりは、農家の副業でした。しかし、1872年(明治5)に学制が公布され、小学校で習字の授業が必修となったことなどで全国的に筆の需要が増え、熊野の筆づくりも盛んになります。さらに、77年(同10)に東京で開かれた第1回内

◀ 丁寧に毛を一つにまとめる

▼ 穂首の形に仕上げる「芯立て」をする香川さん



国勧業博覧会で、出品された熊野筆が入賞し、熊野筆が注目されるようになりました。

第二次世界大戦後、習字が必修科目から外され、書筆の需要は落ち込みましたが、熊野では技術を生かした画筆や化粧筆の生産を開始。1958年(昭和33)に習字教育が再開されると、書筆の生産も再び増加。75年(同50)には、国の伝統的工芸品に指定されました。

熊野で代々、筆の製造を行っている老舗、仿古堂(熊野町出末庭)の井原倫子社長は「量産

技術を発展させ、たくさん作れる。その一方で、特別な一品を作る職人もいます。どちらもできるのが熊野です」と持ち味を説明します。課題は、職人のなり手が少ないこと。一人前になるまで10年以上の修業が必要となるのが職人の道。続けられる人材は限られてくるのが実情ですが、井原社長は「特別な注文に応えられる職人。そうした作り手を育てるのが使命だと思っています」と話しています。

熊野筆の製法は、おおまかに12工程。仿古堂で、45年間筆作りを続ける伝統工芸士の香川翠阜さんに、主な作業を見せていただきました。

筆の種類によって、穂首を作るため、ヤギやイタチ、鹿、馬、タヌキなどの原毛を選び、組み合わせる「選毛・毛組み」、毛をまっすぐにして余計な脂肪分などを除く「火のし・毛もみ」のあと、くしで毛をそろえる「毛

そろえ」、半差し(小刀)を使って悪い毛を抜く「逆毛、すれ毛取り」を入念に行います。

選別した原毛は、必要な長さに合わせて切りそろえます。ここまでを「下仕事」といい、穂首を作る準備です。この後の作業を「台仕事」といい、穂首を形作っていきます。

台仕事の最初は、様々な長さの毛を一つにまとめる「練り混ぜ」。水に浸した原毛を薄く広げ、端から何度も折り曲げて重

ねます。混ぜ終わったら、薄い糊で固め、平らな塊にします。この塊を筆一本分に割って穂首の形にするのが「芯立て」という作業です。

このあと、書き味と墨含みをよくするため、上質の毛を薄く巻き付ける「衣毛巻き」、乾燥させた穂首の根元を麻糸で縛り、焼きごてを当てて焼き締め「糸締め」を行って、穂首が出来上がります。できあがった穂首は、「くり込み」作業で筆

軸に収め、根元まで布海苔(ふのり)を含ませ、形を整える「糊固め」、軸に工房名などを入れる「銘彫刻」を終えて、熊野筆が完成します。

香川さんは「未来へつなぐ日本の書」で実演する予定。「使い手の方が自由自在に扱えて、心打たれる線が引ける筆が作れば、と思います。ずっとやってきました。会場で筆作りをするのは光栄で、いきどろしています」と話しています。

甲州雨畑硯

貴重な原石 伝統の手彫り



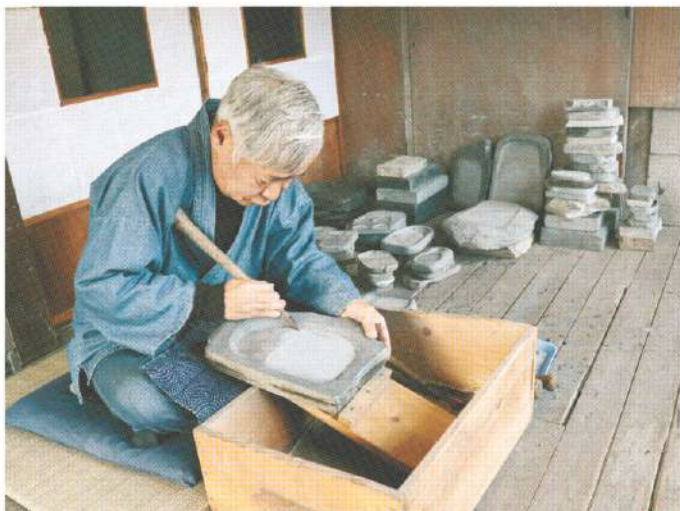
峯硯堂本舗店内には雨畑硯がずらり

硯は、中国で誕生しました。日本には、飛鳥時代頃に渡ってきたとされています。中国産の硯は、「唐硯」と呼ばれ、端溪硯や歙州硯、澄泥硯の「三大名硯」が有名です。対する日本製は「和硯」と呼ばれますが、日本では平安時代頃まで、石の硯ではなく、焼き物の「陶硯」が主流でした。

この時代、文字を書くのは貴族や僧侶、官吏などで、硯で墨を磨るのも、彼らに限られていました。その中で、官吏の多くは、食器や容器として作られた陶製品などを硯に転用して使っていたことが、発掘調査などで判明しています。石の硯は、主に、粘板岩や輝緑凝灰岩といった硬

い岩石を採取・採掘して使いますが、当時の日本では、そうしたことがまだ一般的ではなかったことや、その頃の中国で陶硯が流行していたことなどが背景にあるとみられています。

やがて、国内でも硯に適した石が見つかるようになり、さまざまな和硯が作られました。現在、日本では、国の伝統的工芸品に指定されている雄勝硯(宮城県石巻市)、赤間硯(山口県下関市、宇部市)などがありますが、なかでも雨畑硯(山梨県



ノミの柄を肩に当て彫る雨宮峯硯さん

質の高い文具の製造技術



日本一の生産高を誇る熊野筆

雨畑硯の原石



富士川町)は、その品質の高さから多くの書家に愛用されています。

雨畑硯の産地、富士川町の鰺沢地区は、南アルプス・身延山の北側に位置し、日本三大急流の一つ、富士川が流れています。原石の雨畑石は、700年以上前、富士川の支流・早川に流れ込む雨畑川の上流で発見されたと伝わります。黒い粘板岩で、硬く、緻密な石質は、硯に最適といえます。「中国の端溪石よりも硬い」と、富士川沿いに工房を構える老舗・峯硯堂本舗の副代表、雨宮正貴さんは話します。

硯は、磨る場所を丘(陸)、磨った墨をためるところを墨池(海)、丘から池に向かう斜面を落潮などと呼びます。丘の部分には、鋒錠と呼ばれる、目で見えないほどのヤスリのような凹凸があり、墨はこの鋒錠によって磨りおろされていきます。磨った墨の質は、この鋒錠によって変わります。「鋒錠が細かく、硬く均等にあるほど良硯と言えますが、雨畑石はその特徴を備えています」と雨宮さん。石が硬いということは、鋒錠がすり減りにくく、使い始めと

和の伝統工芸 世界へ発信

同じ品質の墨が長期間磨れる、ということ。丘の部分に「ねずみ足」と呼ばれる細かな文様がある原石は、雨畑石の中でも特に良質で、雨畑硯の最高級品であるといえます。

一方、石の密度も墨の質に関係します。墨は、徐々に石に水分を吸われ、滑らかさを失っていきます。「雨畑石は、粒子が細かくて均一なので、水を吸い込みにくい。手で持っているとき、(手の水分で)石がぬれてくるほどです。さらさらした墨が長く保てるのも特徴です」。こうしたことが「唐硯に勝る和硯」と評される理由でもあります。

◇

硯は手作りで作られます。職人は、原石を見て形を整え、何種類ものノミやタガネを使って少しずつ彫り上げます。原石をみて、どちら側に墨池を彫るかを決め、構図を考えたと、彫りの作業にかかります。

硬い石を彫るため、簡単には



石を彫るノミやタガネ

刃が入りません。ノミの柄を肩に当て、体全体を使って彫り上げます。「石との真剣勝負ですね」と、峯硯堂本舗代表の雨宮峯硯さん。56年にわたって石に

向き合い、国の「現代の名工」にも選ばれています。原石によって硬さが違うので、力加減を考えて「薄紙をはがすように」彫り進めるといいます。

■画仙紙・料紙

染めや模様 オリジナルも

書道で使われる用紙は一般的に、漢字や大字仮名、中字で主に使われる画仙紙と、仮名の細字に適している料紙(仮名料紙)に大別されます。

画仙紙は、中国で作られている「宣紙」を日本で模したもので、日本で作られた宣紙という意味で和画仙とも呼ばれます。

「宣紙」は、中国・宣州に自生する青檀と呼ばれる木の樹皮を主な原料とし、稲わらなどの綿料を加えて漉かれた紙です。

白く、滑らかな紙質で、濃淡が出しやすい細やかなにじみが特徴で、漢字や水墨画の制作に適しているとされます。綿料が少ないほど、にじみが少なくなります。日本では、薄手で比較的にじみが多い「綿料単宣」が好まれています。

中国から日本に渡ってきた宣紙は、「唐紙」などと称されて珍重されましたが、やがて、日本でも楮や三桧、雁皮などの原料を使った和紙が誕生し、製紙技術の進歩にともなって、画仙紙が作られるようになりまし



破り継ぎの作業

1枚彫るのに最低でも1週間。彫りが終わった硯は、磨きかけます。全体に水をかけながら、丘や墨池の部分などに砥石をかけます。荒目から中目、

細目と、慎重に磨いていきます。磨き終わった硯は、墨や黒漆を何度も塗って仕上げ、ようやく、黒光りする雨畑硯が完成します。「未来へつなぐ日本の書」では硯作りの実演が行われる予定。峯硯さんは、「世界の人に高品質な雨畑硯のことを、より知ってもらえる機会になるのでは」と話しています。

た。漉いたままの状態を「素紙」といい、各生産者により、原料の配合割合、漉き方があり、墨の吸い込み、にじみなどの具合はさまざまです。一般的には、漉いたばかりの紙よりも、しばらく置いて「枯れた」紙の方が書きやすいとされています。

素紙に対して、にじみ止めなどを施し、調整した紙を加工紙といえます。にじみ止めは、膠とミョウバンの水溶液を素紙に

塗る「礬水引き」と呼ばれる作業で行います。回数を重ねるほどにじまなくなりますが、多すぎると墨をはじくようになる弊害があります。このほか、紙に色を付ける「染め」や「ぼかし」、金箔や銀箔の切箔を散らしたり、粉状の金銀(砂子)を振ったりする加工などがあり、仮名用に多く使われます。

仮名は、細い筆先で、しなやかな線を流れるように続けていくため、筆のすべりがよく、できるだけにじみの出ない用紙が好まれます。このため、仮名を細字で繊細に表現するための用紙は「仮名料紙」といい、原料の密度が画仙紙に比べて高く、滑らかな質感の紙で作成されます。にじみ止めだけではなく、染めやぼかし、金銀彩のほか、何種類もの料紙を合体して1枚の料紙にする「破り継ぎ」や「重

ね継ぎ」といった継ぎの技法など、さまざまな技術を駆使して、美しく装飾されています。古筆には特に優れたものが多く、京都・西本願寺所蔵の「三十六人家集」(国宝)など、非常に美しいものも残されています。

◇

岡山市東区で画仙紙や料紙の研究開発などを行う「栢菅美術料紙研究所」は、書家・栢菅溪雨(純美)さんが、料紙研究のために設立しました。展覧会で



にじみ止めをする「礬水引き」

古筆の名品を目にし、その素晴らしいさにうたれた栢菅さんは、古筆の料紙を再現すべく、研究をスタート。最初は失敗続きでしたが、博物館や美術館を回ったり、知人のついでで実物を手にとって観察したりするなどして、古筆の料紙を現代にのみがえらせることに成功しました。

現在、同社では、オリジナルの料紙も開発し、注文に応じての製作も行っています。染めやぼかし、継ぎのほか、いろいろな模様を彫った版木の上に紙を敷き、イノシシの牙で磨いて模様を浮かび出させる「磨き出し」など、古来の技術を使い、手作業で画仙紙や仮名料紙などを作っています。製品には、清書用と練習用があり、紙に墨を置いた際、どの程度水を吸い込ませるかの加工程度を0番から9番まで分け、作品の意図によって選択できるようにしています。「未来へつなぐ日本の書」では、染めの技法である「墨流し」や、破り継ぎの実演などを行う予定。同社の山根憲男さんは「1000年前にすでにこういうものがあり、現在も続いているということを知ってもらえれば」と話しています。

デジタル教科書の推進議論

教育現場に懸念の声も

国の「GIGAスクール構想」で小中学生の児童・生徒に「1人1台」の学習用端末が配備され、2019年度から使用可能になったデジタル教科書も、24年度から教科を絞って、本格的な導入が始まりました。現在、小中学校の英語では100%、算数・数学は55%の児童・生徒が使用できる状況になっています。

デジタル教科書をめぐっては、23年2月の中央教育審議会（中教審）まとめで「当面の間、紙の教科書とデジタル教科書を併用」とされてきましたが、24年9月から、中教審のデジタル教科書推進ワーキンググループ（作業部会）がスタート。デジタル教科書をどう推進するかや、「当面の間」以降のデジタル教科書のあり方などについて検討が行われ、紙とデジタルの関係や、教科書代替教材というデジタル教科書の位置づけについてどう考えるかなども議論されます。

デジタル教科書は、紙の教科書をそのままデジタル化したものです。拡大表示ができたり、音声での読み上げ機能があったりする、デジタルならではの機能が追加されているものの、内容はまったく同じ。今後、国語などにも拡大されると見込まれています。

文部科学省は、紙とデジタルの使用に関する組み合わせについて、同ワーキンググループに▽すべての教科でデジタルに置き換える▽すべてまたは一部の教科で紙とデジタルを併用▽一部の学年または教科でデジタルを主な教材とする▽学校の実態など

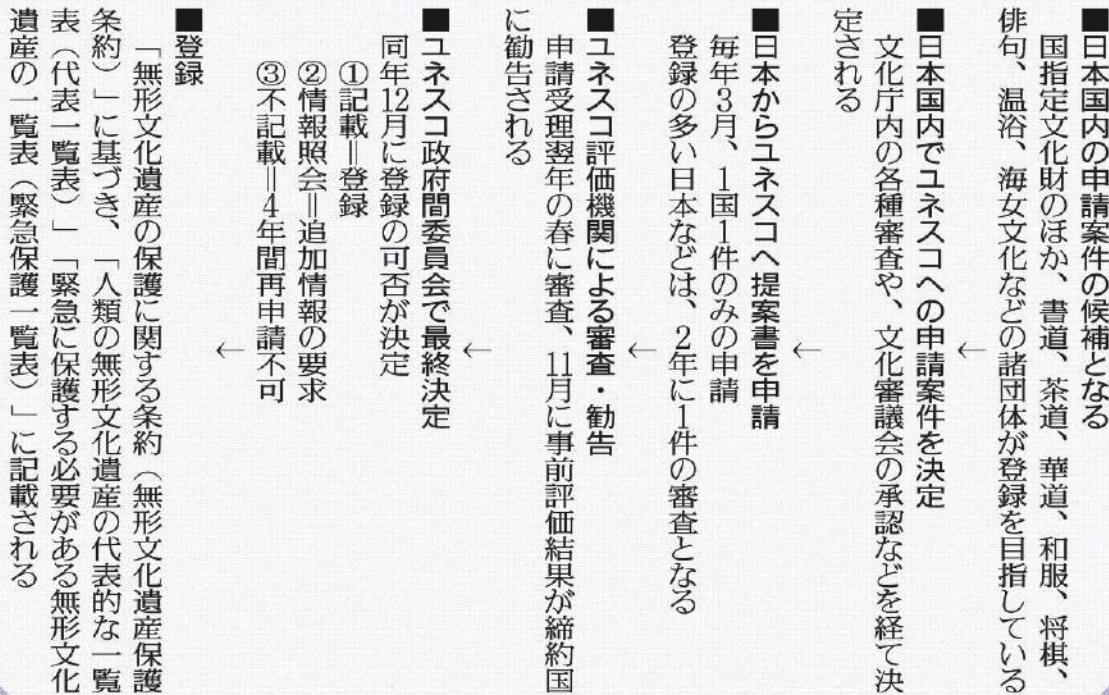
スウェーデンは「紙への回帰」

そうした中、デジタル化をいち早く推進し、紙の教科書を原則廃止していたスウェーデンは、22年の政権交代を機にデジタル化が見直され、紙の教科書への回帰が始まっているとされています。同国では、22年に行われた、経済協力開発機構（OECD）の国際学習到達度調査（PISA）で、「数学的応用力」「読解力」「科学的应用力」のすべてで

18年の前回調査よりも順位を下げ、その一因に、デジタル教育が挙げられました。PISAは、参加国の教育制度の長所と短所を明らかにし、政策立案に役立つデータを提供することが目的の一つで、同国の「紙への回帰」の理由には、調査結果を受けたデジタル教育への懐疑的な見方もあるようです。

一方、日本では、デジタル教科書が授業内容の理解に役立つというとの調査結果もあります。デジタル教科書と学習との関連を調べた、23年度の文科省委託事業「学習者用デジタル教科書の効果・影響等の把握・分析等に関する実証研究事業」大規模アンケートの中で、デジタル教科書の使用頻度と授業内容の理解との関連を調べたところ、いつもデジタル教科書を使っている児童・生徒は「（授業内容が）よくわかる」と回答した割合が6割近くに

ユネスコ無形文化遺産登録への流れ



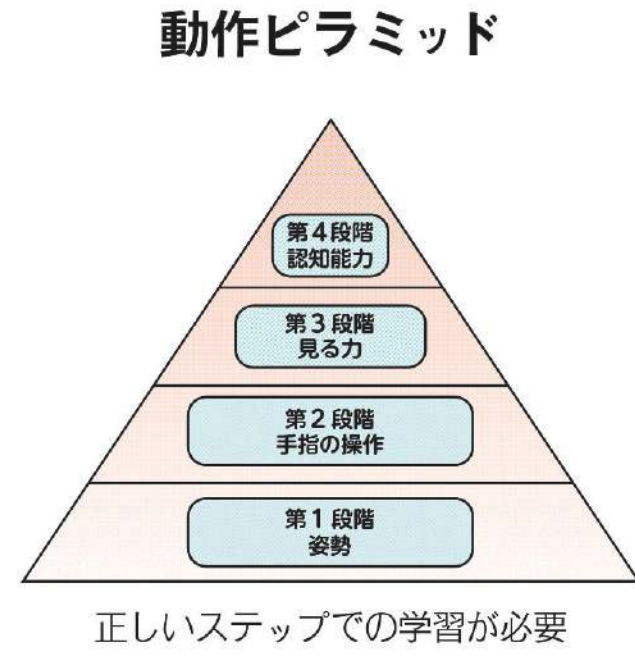
「ユネスコ無形文化遺産」日本の登録状況

平成15年	無形文化遺産の保護に関する条約採択
平成18年	4月に同条約発効
	目的…無形文化遺産の保護、無形文化遺産の重要性及び相互評価の重要性に関する意識の向上等
平成20年	登録3件 能楽、人形浄瑠璃文楽、歌舞伎 ※すでにユネスコで傑作宣言されている3件が登録
平成21年	同9件 雅楽、小千谷縮・越後上布(新潟)、奥能登のあえのこと(石川)、早池峰神楽(岩手)、秋保の田植踊(宮城)、チャッキラコ(神奈川)、大日堂舞楽(秋田)、題目立(奈良)、アイヌ古式舞踊(北海道) ※中国書法が登録
平成22年	同2件 組踊(沖縄)、結城紬(茨城・栃木)
平成23年	同2件 壬生之花田植(広島)、佐陀神能(島根)
平成24年	同1件 那智の田楽(和歌山)
平成25年	同1件 和食：日本人の伝統的な食文化 ※モンゴル書道が登録
平成26年	同1件 和紙：日本の手漉和紙技術(石州半紙、本美濃紙、細川紙)
平成27年	日本書道ユネスコ登録推進協議会発足
平成28年	登録1件 山・鉾・屋台行事
平成30年	同1件 来訪神：仮面・仮装の神々
令和2年	同1件 伝統建築工匠の技：木造建造物を受け継ぐための伝統技術
令和4年	同1件 風流踊
令和6年	同1件 伝統的酒造り
提案中	書道



「動作ピラミッド」で苦手を発見

「動作ピラミッド」は、日常のさまざまな動作がどのように行われているのかを4段階に分けて図式化したものです。四つに分けることで、どの



は分かってももらえぬかを考え、この方法を編み出したといえます。それぞれ異なる子どもの課題

第1段階は「姿勢」で、体のバランスの土台となる機能。第2段階は「手指の操作」で、握ったり、つまんだりする両手の指先の動きに焦点を当てたものです。第3段階の「見る力」は、手元を見たり、話している人に目を向けたりと、目を見たり動かしてものを見る力のことで、第4段階の「認知能力」は、話に注意を向ける、やり方を考える、形を理解するといったことのほかに、意欲なども含まれます。

「動作ピラミッド」は、いろいろな動作、たとえば「靴下をはく」「お箸を上手に使う」といった生活動作がうまくできない場合にも使うことができますが、「文字を書く」という動作に当てはめると、第1段階は座って正しい姿勢を保つ、第2段階は、鉛筆の操作、第3段階は、教科書や黒板を見て、ノートに視線を移すなどの動作、そして、第4段階は、教師の話を理解して、書き順を考えたり、文字の大きさをそろえて書いたりする、ということになります。

解決策を図式化 指導時の助けに

笹田さんは、「ピラミッド」を考案したきっかけについて「各地の学校を訪問して、書字が苦手な子どもたちを見るうち、根本の原因は姿勢の問題だった、とか、鉛筆の持ち方だった、あるいは、目の動かし方に課題があった、といったことが見受けられました。こうした場合には、子どもに繰り返し書かせるだけでなく、なかなか改善されません。そこで、どこに課題が潜んでいるのか、気づききっかけになるツールにしてもらうため

第1段階

姿勢

ーション学科教授で、作業療法士でもある笹田哲さんは、作業療法から考案した「動作ピラミッド」というツールを用いた指導を提唱しています。子どもの「できた」を増やすための「動作ピラミッド」と、それを活用した指導の方法などについて、笹田さんに聞きました。

それでは、ピラミッド法を、実際の書字指導にどう生かせばよいのでしょうか。まず、第1段階・姿勢です。座り方はすべての土台です。ここでは、よい座り方をし、その姿勢を保っているかどうかをチェックポイント。もし、これができていないと、指に余計な力が入って鉛筆の操作がうまくいかなくなったり、教師や黒板をまっすぐ見られなかったりするなど、このあとの第2段階から第4段階まですべてに悪い影響を及ぼします。

最初に注目する点は、腰です。よい座り方とは、腰が起きて、頭から背中、腰が一直線になり、椅子の座面に対して直角になっている、いわゆる背筋が伸びた状態です。このとき、骨盤は前傾しています。一方、よくない座り方は、背中が丸まって、椅子にもたれたり、机の上に覆いかぶさるようになったりした状態です。骨盤が後傾する、

このような姿勢になりやすくなります。次の注目点は、両足の裏が床に着いているか、です。足が床にきちんと着いていることは、姿勢を保つ上で重要です。足を投げ出したり、つま先だけ着けていたり、座面に片方の足を乗せていたりすると、踏ん張りがきかないために、姿勢の崩れを招きます。

最後は、体と机の間に適切な距離が空いているかを見ます。体が机に近付きすぎると、下半身が机の下に潜り込むなどして、骨盤が後傾する原因となります。握り拳ひとつ分程度の間隔を空けるのがよいでしょう。

第2段階

手指の操作

第2段階は手指の操作です。ここでは、主に鉛筆の持ち方に注目しますが、それだけでなく、利き手でない方の手できちんと紙を押さえ、固定することができているか、といったことにも注意します。

正しい鉛筆の持ち方は、人さし指と親指、中指で鉛筆を支える「3指握り」です。文



指の体操

第3段階

見る力

第3段階は見る力です。教科書を読む時は、文字を目で追って内容を把握します。また、黒板に書かれたことをノートに写したり、教師の話を書き留めたりする際には、黒板や教師とノートを交互に見るために、頭を上下に動かすのに連動して目を動かすことにもなります。



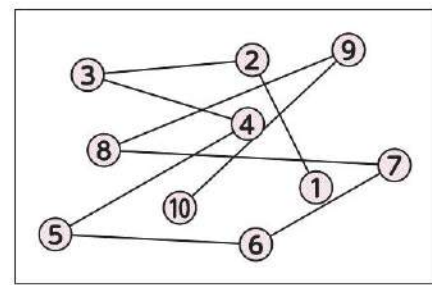
視線の練習「ライン見」

第4段階

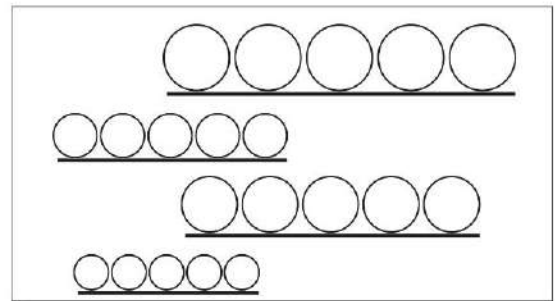
認知能力

第4段階は認知能力。書字の司令塔の役割を果たす脳機能です。文字の形を認識する、教師に注意を向け、話を聞いて理解する、書き順を覚えるといったことが挙げられますが、それに加えて、書くことへの意欲も含まれます。

認知能力に弱点があった場合、マスの中に書く、枠線からはみ出る、文字の大きさがバラバラに配置したプリントを渡して、数字の順に線で結ばせたりすると、目の動き



1から10まで順番に線で結ぶ練習で見る力を養う



笹田 哲 氏

ささだ さとし 神奈川県立保健福祉大学リハビリテーション学科教授。作業療法士。明治学院大学大学院修了(心理学修士)、広島大学大学院医学系研究科修了博士(保健学)。発達障害作業療法学が専門で、特別支援教育と作業療法、人間作業モデルの臨床応用などの研究を行っている。著書に「発達に気になる子どもの運筆力・認知力が身につくワークブック」「発達に気になる子どもがうまく書けるようになる斜めマス書字ワークブック：ひらがな・カタカナ・数字・漢字」(いずれも中央法規出版)など。



・背筋を伸ばして握り拳ひとつが入るように
・足を床に着けて安定して座る

自筆の文字

手書き文字は書き手の人柄や個性、思い、そして、筆を持った時の心の動きを伝えます。人を引きつける日本の伝統文化。その魅力を、いろいろな分野で活躍する方々に語ってもらいました。
(肩書は取材時)

女優
秋吉 久美子 氏



あきよし くみこ 静岡県出身。幼少期を徳島県で過ごし、高校卒業まで福島県いわき市で育つ。1972年、映画「旅の重さ」のオーディションを受け、デビュー。その後「赤ちようちゃん」「妹」「バージンブルース」と立て続けに主演。日本アカデミー賞優秀主演女優賞など数多くの賞を受賞。一方で詩集を出版するなど詩人としての面も。近著に作家・下重暁子との母や家族をめぐる対談を収めた「母を葬る」(新潮新書)がある。

「打つ文章」と「書く文章」とでは、文章が違いますね。打つ文章の方がカジュアルかな。手書きは、何となく、作品っぽくなっていく。原稿用紙の方が全体を見渡せて、いろいろなことが見えてくる感覚があります。

ブログを本にしたことがあるんですけど、パソコンで打つ方が分かりやすい時もあるんですよ。それに比べて、「書く文章」の方は、行って帰って、いらぬものを削って、つじつまを合わせて、形容詞を選択して整えて。作品になっていく、という感じですね。パソコンで書く時は、あまりそういうことをやらないんです。同じ私が書いてるんですが、文章が変わってくるんです。先日出版した「母を葬(おく)る」冒頭の「まえがきにかえて」は原稿用紙に書いたんですけれど、パソコンで打った文章とは、だいぶ違ってきます。手書きには、降りてくる、っていうことがあるんじゃないでしょうか。私は、あ、書かされてるな、っていう感じがしています。

「手書き」は作品のよう

全体を作品として完璧にするための、肝みみたいなものが降りてくるということですね。

書は、友人に誘われたのがきっかけで、年に3回くらい先生のところに行つて、教えていただいています。常にやっているというわけではなく、何かきっかけとかチャンスがあったときにやらせていただく、という感じですね。一昨年は、産経国際書展に特別出品さ

せて、みなさん胸をなで下ろすということをやっています。

このころは、寛永の三筆のひとり、近衛信尹が「推し」ですね。信尹が長谷川等伯のびょうぶに賛を書いた「紙本墨画梅原図」は、お互いのバランス感覚の中で、融和させているのがすごいと思つて、ぜひ本物を見てみたいと思っています。あと、良寛や一休の文字はすてきですね。信尹みたいに

かっこよくはないんですが、しみじみと人柄がしのべれますね。

最近、三筆の本阿弥光悦とか、信尹とか、良寛とか、一休のような文字が書けたらいいなと思うようになりました。字の速さ遅さ、強さ弱さをすべてコントロールできて、しかも穏やかで、たおやかに、品のいい優しい文字が書けたらと思うんですけれど、そのためには、私の嫌いな臨書が必要なんじゃないですか。いきなりそんな域には達しないでしょうから。ただ、あれもこれもやりたいことが多くてそこまで行けないですね。

特別な気持ち表す直筆

文字を書いて相手に渡すとか、公開するというのは、特別なものなと思います。昨今、メールがポピュラーだし、プリンターもありますが、それとは違ったものだと感じます。自分が手書きする時は「特別な気持ちである」という意思表示なんです。僕にとつては、キーボードでタイプ打ちする方が面倒、ということもあるんですけれどね。

墨をすって、筆を執って、ということはほぼないですが、筆ペンは使いますね。先日、ヒーローフェスティバルというイベントで主催者からオリジナルの色紙に格言のようなものをひと言書いてくれといわれまして。そういう時は、サインペンではなく筆ペンを使って書きます。筆ペンも含めて、筆は、ペンや鉛筆と違って書く速度が遅くなりますよね。そうすると、書いている間に文字に気持ちが入ってくる気がするんです。

もうひとつ、筆で書くと、形にバリエーションができて、ただ文字を書くだけでひとつのデザインになるんです。サインペンよりもパワーがある。僕は昭和歌謡が好きなんです。当時のレコードジャケットの曲タイトルは、手書きの筆文字が結構多くて、それだけで存在感がある。ほかにデザインしなくてもいいんです。僕も、自費で出すCDのジャケットなどは手書きです。誰かの手に渡るものは、既製品にしたいくないというのと、ほかと同じになりたくない

その人の思考や人柄が、書いた文字から伝わってくる気がしますね。作詞家の先生の前稿も歌謡曲は手書きで、それぞれに個性があります。中には一枚だけ書いた清書を歌手に渡す方もいて、そういったものは歌手にとっては宝物ですよ。『あなただけのために書いたものです』というね。

僕も歌詞を書くんですが、第1稿、第2稿と残しておくと、しつくりこなかった時に見返して、前の言葉の方がよかった、ということがあ

るんです。過去の自分に助けられるという感じです。

今、僕が歌謡界のいろいろな方を訪ね、対談したものをまとめた「たずねる」という本を書いてるんですが、編集者から返ってきた原稿に入れる直しも、全部手書きです。

手書きとデジタルとの差が何かというのを考えてみると、パソコンなどのデジタル文字は読みやすくて「脳が喜ぶ」ものですが、手書き文字は「心が喜ぶ」ものだと思いますね。

手書きとデジタルとの差が何かというのを考えてみると、パソコンなどのデジタル文字は読みやすくて「脳が喜ぶ」ものですが、手書き文字は「心が喜ぶ」ものだと思いますね。

タレント
半田 健人 氏



はんだ けん 1984年、兵庫県芦屋市出身。「ジュノン・スーパーボーイ・コンテスト」のファイナリストに選ばれたことを契機に、芸能界へ。2003年、「仮面ライダー555」乾巧/仮面ライダーファイズ役で初主演を飾る。高層ビル、鉄道や昭和歌謡などへの造詣も深い。16年にはビクターエンタテインメントからメジャー・デビュー・シングル「十年口マン」をリリース。俳優のみならず音楽でも精力的に活動している。

心の動き伝える

フジオフードグループ本社社長
藤尾 政弘 氏



ふじお・まさひろ 1955年大阪市出身。79年藤尾実業を創業。88年フジセイ・コーポレーションを設立、「まいどおおきに食堂」1号店を開店。99年フジオフードシステム設立、代表取締役。2021年に持ち株会社体制に移行、代表取締役役に就任。多様な業態の外食店を展開し、国内のみならず中国・上海やシンガポールにも進出している。現在、大阪外食産業協会理事、天神祭花火奉賛会会長、大阪天満宮氏子総代などをつとめる。

両親は、大阪・天満の商店街で食堂を経営していました。私も小さいころから店を手伝っていました。が、小学校5年生くらいの時でしたか、店のメニューを書いたんです。『ひやしそうめん』と。そうすると、横でメニューを書いていた母がその文字をみて、「なんや、熱そうなひやしそうめんやな」と言っただけです。

はじめ、何を言われているのか分からなかったんですが、食べ物屋のメニューは、お客さんが見て、おいしそうやな、食べたいな、と思ってもらわないといけない。冷たいものは冷たいように書く。温かいものは温かいように書く。いわば、胃袋に感じてもらうことが必要なのだ。そのことを、母に教えてもらいました。その教えから、私の文字というものは出てきているんです。

看板 感謝の思いを表す

両親は、看板の方は、業態というか、どういう店をお客さんに分かってもらうのが大事なので、店のメニューの文字とは少し変えています。『まいどおおきに』という言葉は、母がいつもお客さんに言っていた言葉で、頭を下げて感謝しているということを文字に表そうと書きました。

思いを書いているんですね。一店舗一店舗大事にするという。店で働いているメンバーの皆さんに書く。看板の方は、業態というか、どういう店をお客さんに分かってもらうのが大事なので、店のメニューの文字とは少し変えています。『まいどおおきに』という言葉は、母がいつもお客さんに言っていた言葉で、頭を下げて感謝しているということを文字に表そうと書きました。

多いですね。また、手紙を出すことも、自分の思いを伝えるということ。そのためには、自分の文字で書くのがよいと思います。手書きするのは、思いを伝えるためです。上手に書くのではありません。丁寧に書くのが大事ではないでしょうか。思いを伝える文字を書くということは、自分を大切にすることを覚えていることではないかとも思います。自分は書道を習ったことがないんですが、今からでも習ってみたいですね。

私は、大衆食で日本一になりたい、と思ってやってきましたが、食べてもらってほっとする、よかったな、おいしかったなという店にしたいですね。1人で食べていると味気ない気がするんです。そこで働く人がいて、周囲に話があって、調理の音、魚を焼くにおいがする。そういう所で食べた方がおいしいと思います。ですから、店の雰囲気作りは大事です。メニューの文字も、そのために一役買っているわけなんです。あまり上手ではないんですけどね。

ファッションモデル
安座間 美優 氏



あざま・みゆう 沖縄県出身。2002年に「ミスセブンティーン」グランプリに選出され、「Seventeen」専属モデルに。その後、「non-no」「CanCam」「AneCan」各誌の専属モデルとして活躍している。現在はモデル、女優としてドラマ、映画、バラエティー番組などでも幅広く活動している。趣味の書道は八段で、最近は命名書でもその腕前を披露している。

小学校3年生の時に習字の授業が始まり、字を書くことが楽しくて、習字教室に通わせてもらいました。習い事はいくつもしていましたが、自分から「やりたい」と言ったのはお習字だけです。そのあと、歌やダンスなどのレッスンが忙しくなったこともあって、習い事は全部やめてしまったんです。でも、15年くらい前、趣味が何もなくあったので、もう一度筆を執ることにしました。今は、月に1回くらい先生のアトリエに行き、ご指導いただいています。

書に関わる仕事楽しい

2023年4月には、ウェブメディアで月1回、私が選んだ言葉を挿入してプレゼントするお仕事をいただきました。1年間続けさせていたのですが、その月に合った言葉を選ぶのも難しかったんです。が、読者にお贈りするものなので、かっこいい、きれいな文字にしよと頑張りました。書展などには出品したことがないので、こんなふうに、毎月作品を発表するのは初めてで、けっこう緊張しました。

しまいますし、私もそうなんです。が、お礼状や年賀状を手書きするときは、言葉や表現を考えて、気持ちに乗って書いて、一発勝負という印象があります。手書きの手紙は、もらえるとうれしいですよ。最近はどういう機会も少なくなりました。今年は、年賀状も減ったそうなので、少しさみしい気もします。

きれいな文字を書けることで、損をすることは何もないと思います。逆に、きれいな文字が書けることで、他人から見直されることもあると思います。若い子ばめんどくさいと思うかも知れませんが、書く機会があれば、少しでも書き続けてほしいと思います。

自宅でも半紙に向かって練習するんですが、すぐ時間が経ちます。自分自身、まだ会心の作というものは書いていませんが、文字を書くことは年を重ねてもできるので、頑張っ続けていきたいです。それが、自分のためだけでなく、人のためになることがあれば、うれしいですね。

第20回 手書き文字ばんざい!

熱い気持ち 字に宿る



この日は、日本書芸院展で魁星作家に選ばれた子安尊喜さんの大作揮毫でスタート。たくさん参加者が周囲で見守る中、人気アニメ「鬼滅の刃」に登場したキャラクター、煉獄杏

寿郎の名せりふ「心を燃やせ」を一気に書き上げました。子安さんは「周りで見ている子どもたちの熱い気持ちが伝わってき

書に出会って人生が豊かになりました。ぜひ、心を燃やしなから手書き文字を楽しんで、一緒に発展させていければと思います」と呼びかけました。

このあと、参加者は会場に展示する色紙の作品制作に取り組みました。テーマに沿った「みらい」「つなぐ」などの仮名や「愛」「輝」といった漢字の手本から、好きな文字を選んで筆を持ちました。子どもたちは、一緒に参加した書道教室の先生や、お父さん、お母さんからアドバイスを受けたり、友だちに作品を見せて意見を聞いたりして、清書作品を仕上げました。

作品の展示コーナーでは、貼りに出された自分の作品の前で立って、記念撮影をする姿も見られました。初めて参加した小学校1年生の生野来実さんは「最近、習字のお稽古を始めた。筆で書くのは楽しいです」と笑顔で話し、母親の潤子さんも「いつもは娘が書くのを見ていただけですが、今日

は一緒に書いて楽しかった。親子で参加できるのがいいですね」と話していました。また、「紡」を書いた6年生の松永陽人さんは「もう少しうまく書けたかも。久しぶりの参加でしたが、書くのは楽しかったです」と話しました。3年生の玉本楠奈さんは「つなぐ」を書き「お稽古で3文字を書いているので書きやすかったです。(自分の名前の)『な』という文字が入っているの、これを選びました」と、少し恥ずかしそうに語っていました。

最後に、日本書芸院の木村通子・常務理事手書き文字部部長があいさつに立ち「とても個性の表れたすばらしい作品がいっぱいできあがりました。手書き文字は、文字や文章以上のものを、送った相手や、いろいろな人に与えることができるものだと思います。どうか、手書き文字を大切に、学校でもおうちでも、たくさん文字を書いてください」と締めくくりに、様々な年齢の人たちが文字を書くことを楽しみ、その魅力に触れた催しは、盛況のうちに幕を閉じました。

手書き文字の魅力に触れることで、書を楽しむ心を育てる「第20回手書き文字ばんざい!」が、令和6年10月26日、大阪市中央区のOMMビルで行われました。今年のテーマは「いのち 育む 未来へ」で、幼児から大人まで約240人が参加。臨書や寄せ書きをしたり、黒い樹脂の丸皿を使って、蒔絵風の作品を作ったりして、楽しい時間を過ごしました。

手書き文字ばんざい!

読書週間初日の10月27日が「文字・活字文化の日」に制定された2005年、本院と読売新聞社が始め、毎年10月に開催している。

手

書きの文字

書

写・書道ってすばらしい

き

れいに美しく

文

字を書こう

字

の美しさは文化のバロメーター



作品を書き上げた参加者は、

漆器に見立てた黒い樹脂の丸皿に透明な定着液で文字や絵をかき、金粉をまぶして蒔絵風に仕上げる作品づくりを楽しみました。また、会場の後ろに設けられた大型ボードの寄せ書きコーナーでは、子どもたちが筆やサインペン、クレヨンなどを使って「夢」「友情」「一期一会」など思い思いの言葉をつづっていました。このほか、いろいろ歌などをなぞり書きする「街なか書道体験」のコーナーもあり、多くの人が挑戦していました。



【主催】公益社団法人日本書芸院、読売新聞社
【後援】文部科学省、大阪府教育委員会、大阪市教育委員会、読売テレビ
【協賛】あかしや、呉竹、サクラクレパス、ゼブラ、トンボ鉛筆、ぺんてる、墨運堂(50音順)

令和6年全国シルバー書道展

筆で表現 生きがいに

高齢化が進む中、シニア世代の人たちに、筆を持って表現する楽しさや、生きがいを感じてもらうと令和6年の「全国シルバー書道展」が、大阪、京都、奈良など西日本

の2府6県で開かれ、多くの書道愛好家らが訪れました。その中で、1300年の歴史を誇り、数々の歴史遺産が残る古都・奈良での書道展を紹介します。

練習の成果 力作ずらり

奈良展

第36回奈良展は、令和6年9月4～8日の5日間、奈良市美術館（奈良市）で開かれ

ました。出品者は、計280人（男性52人、女性228人）。81歳から90歳の人が63人、91歳以上の人も9人いて、シルバー層の中でも高齢の方々が元気に出品していました。最高齢出品者は、女性が95

歳の松村伊代さん、男性は94歳の太垣淳一さんでした。松村さんは、年齢を感じさせない力強く、迫力のある文字で「澄心静慮」と書きました。一方、太垣さんは、唐代の詩人・王維の五言絶句「柳浪」を、流麗な筆致で書き上げました。

会場には、漢字、仮名、調和体、篆刻の各分野で、それぞれに工夫とたゆまぬ練習の成果を発揮した力作が並びました。

作品は、ゆったりと鑑賞しやすいレイアウトで配置され、出品した作品の展示を友人と見に来た人たちが、書道教室に通う仲間や先生と一緒に訪れて、自分の作品について述べたり、先生の評を聞いたりする人たちがにぎわい、自作の前に立って、家族や友人に記念写真を撮ってもらったり、ほかの人の出品作を熱心に見つめて研究する姿などが見られました。



多くの人が出品作を熱心に鑑賞した



松村伊代さん(95)の作品



太垣淳一さん(94)の作品



私たちは「日本の書道文化」のユネスコ無形文化遺産登録を応援しています。

また、会場には、誰でも気軽に書道に触れられる「街なか書道体験」のブースも設けられ、いろは歌や般若心経のなぞり書きを楽しむ姿も見られました。

会場を訪れた、日本書芸院董事の山本高郁さんは「ちょうどよいくらいの規模で、肩肘張らずに出品できる身近な展覧会なので、ぜひ多くの方に出品していただきたい」と話していました。

留学生ら 書への理解深める

対話型鑑賞会

日本の文化を学ぶ留学生たちに書道作品を鑑賞する楽しさを知ってもらおうと令和6年4月20日、大阪市北区の大阪国際会議場で開催されていた「伝統と創意 第78回日本書芸院展」の会場で対話型鑑賞会が開かれました。ヨーロッパやアジア、南米から訪れ、東京や関西の大学、大学院で学ぶ20歳代の10人が参加。留学生たちは感想や意見を出し合い、議論を促すファシリテーター（進行役）の土橋靖子・日本書芸院理事長の解説やアドバイスを受けながら、書への理解を深めました。

対話型鑑賞は、アメリカのニューヨーク近代美術館で開発されたアートの鑑賞方法です。専門的な知識を必要とせず、それぞれの自由な想像力や鑑賞力で見て、感じることで、作品の魅力を知るとともに、周囲の人たちと語り合うことで自分の考えを深めたり、言語化する力を高めたり、新たな気づきを得たりすることができます。近年、多くの学校や美術館などがその効果に着目し、取り入れています。同院が開催するのは小・中学生を対象に実施した前年に続き2回目です。

今回の鑑賞会について、土橋理事長は「（書を）『読まずにまずは見てほしい』『先入観を持たずに見てほしい』との思いがあり、そこから留学生の方々に来ていただくことを考えました」と説明。

留学生たちに「みなさんの新鮮な、鋭い美意識で感じたことをお聞かせいただければ大変うれしいです」と呼び掛けました。

同展は、文化勲章受章者、文化功労者、日本藝術院会員をはじめ日本を代表する書家の新作を多数展示しており、留学生たちは50歳以下の若手から選ばれた「魁星作家」10人の作品を事前に画像で予習。このうち、子安尊喜さんの「春風」を題材に感想を伝え合うことになりました。

「春風」は「浅緑みだれてなびく青柳の色にぞ春の風も見えける」（後拾遺和歌集）を4行で表現した作品。留学生たちからは、さまざまな声が上がりました。エルサルバドル出身のホルネホルクス・ルド・ウィッグヘラルドさん（帝京大学）は「若干切れてはい



留学生と対話する土橋理事長

ますけれども、次の文字の方向に向かっていて、絆というか、つながっている感じがします」と感想を述べました。ブルガリア出身のヨアンナ・ドコヴァさんが「字数（画数）が少ないのに作品として成り立っている。しかもそれが仮名だというすごさ」と話しました。

後半は故郷の美しいところと、各自が思う日本らしさについて語り合いました。

インドネシアから訪れているムハマド・オーリアウルラフマンさん（大阪教育大学）は「故郷はイスラム教の影響が強いイメージがあり、モスクのように左右対称の

建物が多いのですが、日本はバランスが不均衡で、そこに違いを感じました」と述べました。

土橋理事長は「留学生の方々が本当にレベルの高いお話をしてくださって、逆にこちらが学ばせていただきました。大事なものは何かというのを、ちゃんと理解していって、書の魅力を共有できるんだということにも、力強さを感じました。日本の書はユネスコ無形文化遺産の登録候補にもなっておりますし、日本のみならず、いろんな方に興味を持っていただけたらうれしいと思います」と手応えを感じていました。

5月7日
～11日
開催

未来へつなぐ日本の書

～空・海・時を超えて～



大阪市此花区の夢洲で4月、2025年日本国際博覧会(大阪・関西万博)が開幕します。大阪では1970年以来55年ぶり、国内では2005年の愛知万博以来20年ぶりの開催となります。日本書芸院では、世界の人々が来日するこの機会に、日本の書を世界の「SHODO」にするべく、オールジャパンの本格の書を世界へ発信するイベント

「未来へつなぐ日本の書～空・海・時を超えて～」(読売新聞社共催、日本書道文化協会特別協力)を実施します。場所は、会場内にあるEXPOメッセ。5月7～11日の5日間です。一流書家の作品展示のほか、最新技術を駆使した書の展示・体験、書家による揮毫・篆刻会などを行います。ぜひ会場へお越しください。



日本の伝統的な生活空間である和室を会場に再現し、掛け軸や屏風、衝立などを配置。和室内に入り、さまざまな書で演出された空間でその精神性や美しさを体験できます。文化勲章受章者の書

日本の代表作家展「いのち輝く未来を『書』で描く」
◇壁面展示
大阪・関西万博のテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」にちなんで現代書道作品を展示します。日本書芸院だけではなく、日本書道文化協会の協力も得て、全国約600人の書家の作品を集め、「オールジャパンの書」を世界へ発信します。また、次世代への継承として、全日本小学生・中学生書道紙上展のベスト100受賞作品から45点、全日本高校・大学生書道展の大賞受賞作品から厳選した21点を展示します。
◇和室展示 生活空間に生きる書

オールジャパンの作品並ぶ／最新技術で「書」体験
会場では、国の登録無形文化財・書道の魅力を国内外に広めて普及発展につなげ、本格の書の継承、書の芸術的価値を次世代へ引き継ぐ催しがあります。主なものを紹介します。



開催期間 2025年4月13日(日)～10月13日(月) 開催場所 大阪 夢洲(ゆめしま)

◇Googleでの映像体験「筆舞幻影」
VRゴーグルを通して、自由な視点で書制作過程を見ることが



井茂圭洞先生、文化功労者の黒田賢一先生(いずれも日本書芸院最高顧問)と高木聖雨先生(全国書美術振興会理事長)、杭迫柏樹先生、吉川蕉仙先生、真神颯堂先生(いずれも日本書芸院名誉顧問)の作品を展示予定です。
◇書が生まれる瞬間に触れる
最新のテクノロジーを駆使した「書」体験
◇エア書道体験「空書招来」
骨格認識技術を使い、空中に書いた書が画面に表示されます。何も持たずに「揮毫」する、新感覚の書道体験です。

ぜんぶのいのちと、
ワクワクする未来へ。

体験・体感 「Activity」
―エンターテインメントとしての「書」の提供―
◇書家による席上揮毫・篆刻会
日本書芸院を代表する書家や篆刻家が、会場内で作品を制作します。会期中、毎日午前11時から開催予定です。
参加予定の先生方(50音順)
【漢字】伊藤一翔、中村伸夫、山本悠雲【かな】高木厚人、田中徹夫、土橋靖子、吉川美恵子【篆刻】真鍋井蛙
このほか、大学生による書道パフォーマンス、対話型鑑賞会、うちわや絵馬などに文字を書いて、書く楽しさを体験するワークショップ、大きな水書板に毛筆で自由に文字が書ける「水書にチャレンジ!」、墨、紙、筆、硯の文房四宝の職人による制作実演なども行います。また、会場入り口近くに特大ビジョン「雅」VISION」を設置、席上揮毫などイベントのライブ映像や、日本を代表する書家の制作風景などを映し出します。

伝統と創意

公益社団法人 日本書芸院

■ 展覧会・審査会

- ＜日本書芸院展＞
日本書芸院会員相互の共励琢磨による「書」の本質的研究を通して、後進の育成に尽力しています。
●日本書芸院展(役員・役職者展) 会場:大阪国際会議場(大阪市北区)
●日本書芸院(三月審査会) ※令和7年以降、展覧会は開催せず、作品集とホームページに作品を掲載します。
- ＜その他の企画展＞
小学生からシルバー世代まで、全世代を網羅する書道展を開催し、書の啓蒙と普及、我が国文化の継承・振興・発展のために活動しています。
●全日本小学生・中学生書道紙上展 小中展新聞紙上
●全日本高校・大学生書道展 会場:大阪市立美術館天王寺ギャラリー(大阪市天王寺区)
●全国シルバー書道展 近畿2府4県および三重・岡山・広島県で開催

■ 講習会

- 教養講座
●特別記念講演会・記念揮毫会
●「手書き文字ばんざい!」(文字・活字文化の日記念イベント)

■ 出版

- 作品集・図録・DVD
●会報
●研究誌・記念誌
●広報紙
●小中展・高大展新聞

広報紙「書くよろこび」を無料でお届けします

「書くよろこび」は、書くことのよろこびや楽しさを広く一般の方にアピールし、書写書道のより一層の振興と発展を目的とした無料の広報紙です(年1回発行)。書道教室や部活動、展覧会場など、書や文字に関する様々な場面で配布、活用していただいています。送料無料でお届けいたしますので、ご希望の部数と送付先を日本書芸院事務所へお申し込みください。お待ちしています。



■ 沿革と概要

- 昭和21年(1946年)11月創立
昭和22年(1947年)5月、社団法人の認可を受ける
平成22年(2010年)6月、公益法人制度改革により、内閣府から公益社団法人の認定を受ける
平成28年(2016年)創立70周年
■現在、北海道から沖縄まで全国に約8300人の会員を擁する我が国屈指の書道団体であり、会員の中から、文化勲章受章者4名(故村上三島、故杉岡華郎、故高木聖鶴、井茂圭洞)をはじめ文化功労者、日本藝術院会員、日本藝術院賞受賞者、日展や読売書法展など全国規模の大公募展の役員・審査員を務める著名な書道芸術家を多数輩出しています。
■毎年、公募を含めた書展や企画展、各種の講習会・講演会を開催しています。